

* 天躰測量術という和綴じの冊子を収蔵

国立天文台図書室に和紙に墨で書かれ、和綴じにされた天文に関係した冊子が届けられた。持参された方は立川市議会議員で、関係者から託されたそうである。この冊子には表紙に和紙の「天躰測量術 小山健三」と書かれた帯封(写真1)が渡してあり、最後のページに「埼玉縣 小山健三」と書かれている。持参された方は、この小山健三氏のお孫さんからこの冊子を託されたそうである。とにかく現在の持主にとってはどのようなものかも知れないので、国立天文台に託したいとの意向なので、アーカイブ室で頂くことにした次第である。この冊子を見た時、観測記録と早とちりして眺めていた。そこでまず、小山健三氏について調べてみると、インターネットで容易くヒットし、「朝日日本歴史人物事典の解説」に載っていた。

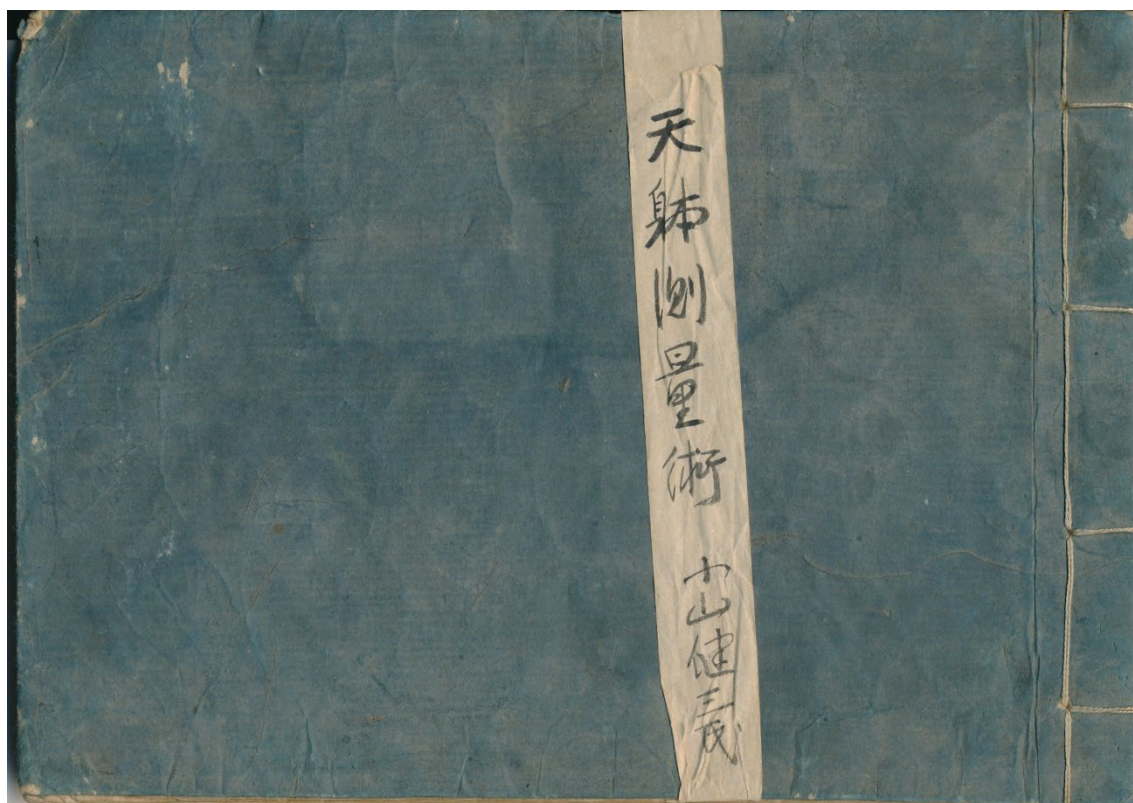


写真1 天体測量術と書かれた和綴じの冊子

小山健三氏は明治大正時代の実業家で、安政5年に武蔵国埼玉郡忍城郭内で忍藩士の長男として生まれたとある。初代東京天文台長寺尾寿がそうであったように、藩校で理数方面の才能を示し、明治5年に上京し、測量術、化学、英語、数学などを学び、長野県師範学校教員を経て、熊谷県で学校教員、温泉の分析などをしたようだ。寺尾寿が上京したの

は、明治6年であり、フランスに留学したのが明治11年である。小山健三は寺尾寿とほぼ同じころ東京で測量術という形で天文学を学んでいたことになる。小山健三は、明治14年に文部省に入り、長崎県立師範学校校長、第5高等学校教諭、東京工業学校教授、文部大臣秘書官、高等商業学校長、農商務参事官などを経て、文部次官を最後に明治31年に、政変のため離職している。明治32年三十四銀行（後の三和銀行）頭取となり、死去するまでその職にあり、大阪金融界の重鎮であった。という経歴の持ち主であった人が、測量術を学んだ際のノートを清書し、和綴じしたものではないかと思われる。演習問題を解いたように読めるページがたくさんある。写真2がこの冊子の1ページ目、目録とある。

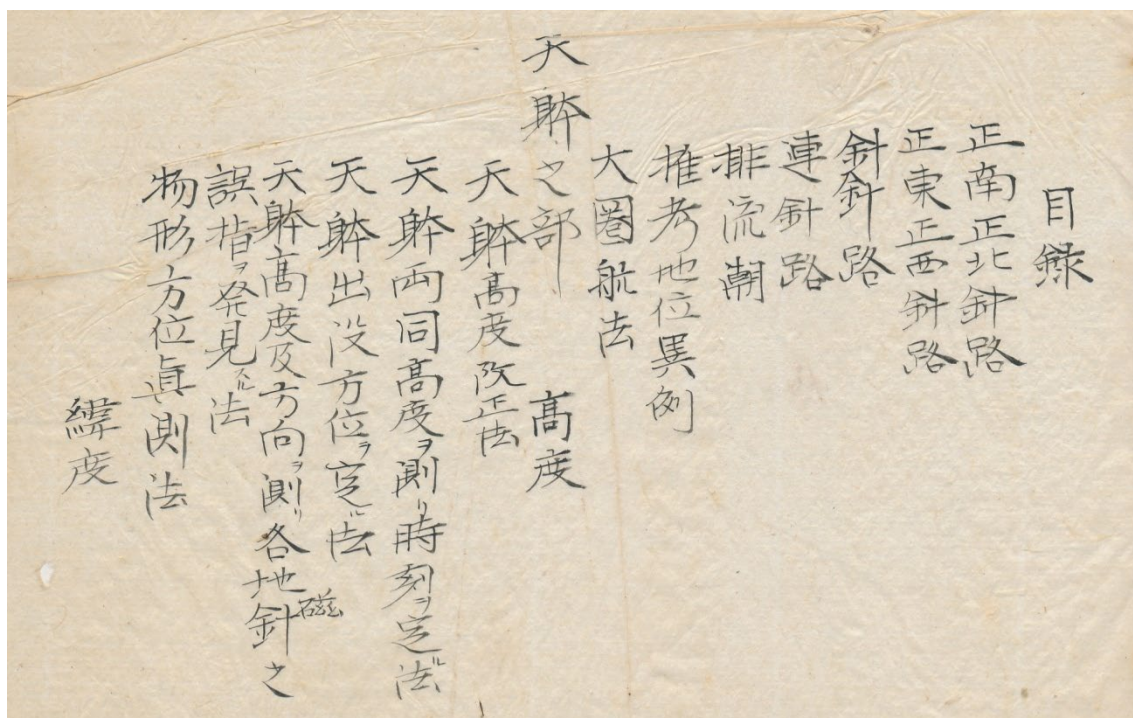


写真2 冊子の第1ページ 目録

2ページ目は1ページの続きで、子午線近傍高度以緯度ヲ定ムル法、子午線高度ニ依テ緯度ヲ定ムル法とある。

本文が始まる3ページ目には、推考地位法 正南正北針路 とあり、「北緯一度三十分ノ地ヨリ北ニ八十里航ス以テ至ル地ノ緯度ヲ問」と始まっている（写真3）。このことから、この冊子は測量術を学んだ際、演習問題を解いたノートではないかと考えられる。5ページ目には設問として、「北緯五十三度三十分東径三十六度十八分四十五秒ノ地ヨリ正東ニ向ッテ五十三里航ス以テ至ル地ノ経緯度を問フ」という問題が出されていて、次ページにその計算式のような数式が書かれている。

それぞれのページはなかなか興味深いことが書かれている。すべてのページをスキャナーで取り込んだので、興味のある方にはデジタルデータとして提供できる。薄い和紙に墨で書かれたもので、二つ折りにして綴じているので裏が透けて見える。スキャナーで取り込む際に二つ折りの中に白紙を入れてスキャンしたので、原本を見るよりスキャンしたも

の方が読みやすい。冊子の厚さはそれほどでもないが薄い和紙なのでページ数は 156 ページに及ぶ。興味深いページを紹介する。

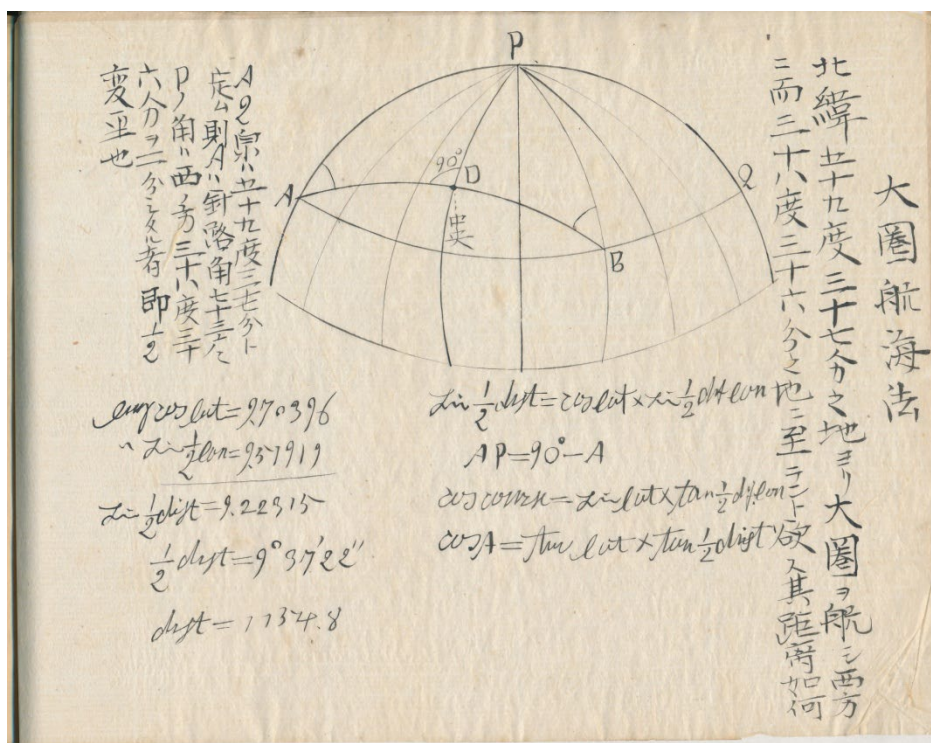


写真 3

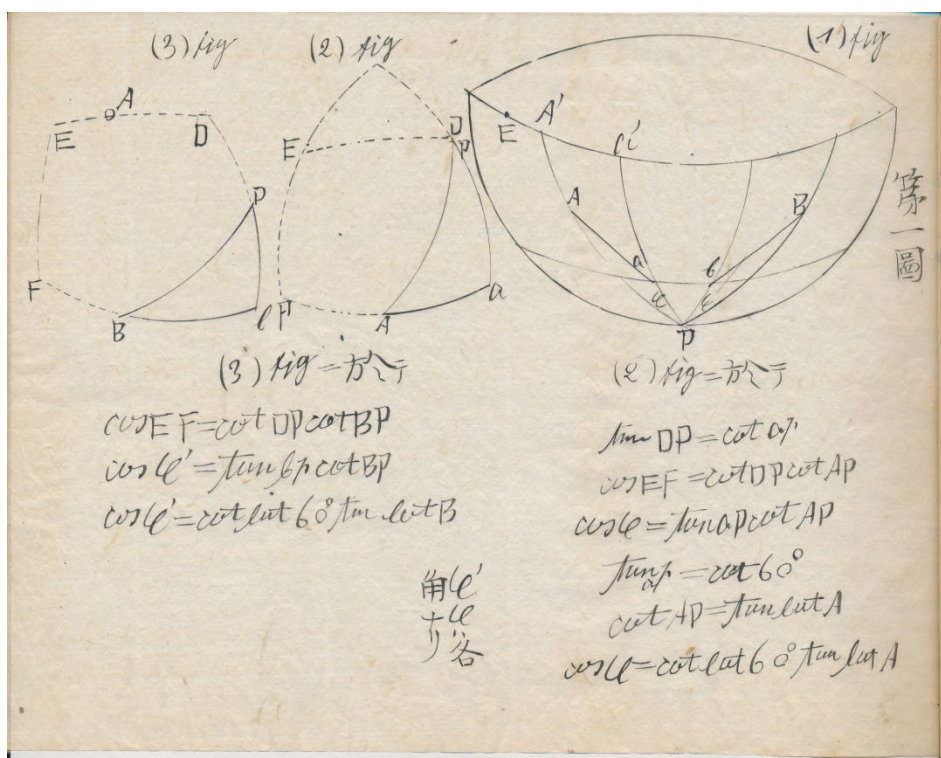


写真 4

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp